有部アビダルマにおける病苦

田中裕成

病による苦しみ（病苦）は、人間が生きていく上で逃れることができない苦しみの一つである。仏教文献においても、古くから苦諦の説明に際して、四苦（生苦・老苦・病苦・死苦）としてよく登場した。釈尊が出家をする際にこれらの苦しみに気がついたことを説いた四門出遊譚は中でも特に有名である。その一方で、説一切有部におけるアビダルマ文献において、病や病苦に関する具体的な説明は、不思議なことに、ほとんど存在しない。病や病苦の具体的な内容は『法蘊足論』において一度、『中阿含』「分別聖諦経」の抜粋のような形で一度登場するのみである。以後の『婆沙論』や『倶舎論』においても病として項目を立てて説明することは管見の限り確認されない。

その中、有部系アビダルマ文献に『四諦論』という論書が存在する。本書は四諦のそれぞれを詳細に注記した書物であるが、その中、苦諦の説示に際して、病と病苦に関する詳細な記述が存在する。おそらく、現存文献の中で最も詳細な病苦の説明は本文献の当該箇所であろう。アビダルマ文献においてこの他に病苦の目立った記述は今まで確認されていない。そのため、本書の病苦の記述を通して有部アビダルマにおける病苦の容相を知りうることができる。

また、本研究に際して、重要な関連資料も発見することができた。『決定義経』という法数をまとめた経典が存在する。本経中にも、四諦の苦諦の説明に際して病苦の記述がわずかに登場し、その注釈である、*Arthaviniścayasūtra-Nibandhana*（以下、Nibandhana）でも、「「病は苦である」とは、苦苦性による、残りは理解しやすい〔ため、省略する〕」と簡潔な注記が確認されるのみであった。あまり注目されたことは無いが、『決定義経』には蔵訳の注釈、*Don rnam par dgon mi za ba'i 'grel pa*（P. 5852, D. 4336）が存在する（以下、『決定義経蔵訳注』）。本書は標題や奥書などがほとんどなく、著者や翻訳者など来歴不明の『決定義経』の注釈である。*Nibandhana* と対応する箇所もあるものの、その殆どは Nibandhana より詳細な注釈を行っている。梵本と類似するものの、全く異なる注釈と言って問題無い。今回の検討に際して、『決定義経蔵訳注』においても「病苦」について詳細な注釈が発見された。さらに、『決定義経蔵訳注』の苦諦の箇所の六割ほど、病苦の八割ほどが『四諦論』と逐語的な対応関係にあることが明らかとなった。

そこで本発表では、まず、基本的な有部系アビダルマ文献に見られる病苦の記述の整理を行う。そのうえで、『四諦論』と『決定義経蔵訳注』を比較検討しつつ、両者における病苦の整理を行う。以上の検討を通して、アビダルマにおける病とは四界（地界・水界・火界・風界）の不均衡であり、病苦とはそれによって引き起こされる苦苦あるいは行苦であることを明らかにする。（1119 文字）

キーワード：　四界、『決定義経註』、『四諦論』